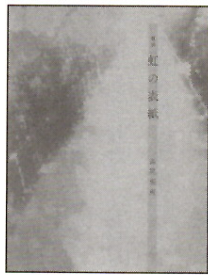


受講者の歌集

黒木三千代

『虹の表紙』

森尻理恵（友の会）



- ・抗がん剤の投与から七日は起きられず吐き
気止め飲み白粥する
- ・子備校から帰ってわれの枕元のボトルの水
を子は替えくるる

『雲の形』

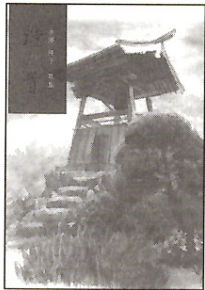
松村史子（実作）



- ・様々な形生み出す夏雲に疎開地に見しきの
こ雲あり
- ・湧き上がる雲の形は涅槃像夫は召されき
八十歳で

『鐘の音』

水澤隆子（実作集中添削）



- ・不沈「大和」を沈めし空母ホーネットの展
示をめぐる悔しさこらへ
- ・平和つて西の果てなる与那国に山羊がのん
びり歩きあること

『蟹の宿』

藤原町子（実作）



- ・蟹宿の客見送りて短歌作るペンを持つ手に
蟹の臭いする
- ・汚染水の流出だけは許されぬ海は地球の血
液だから

『虹の表紙』 森尻さんは地球物理学の研究者

で大学教員です。痛が見つかり、闘病しながら、仕事にも励まれる生活です。処遇をめぐることごたごたもあります。しかし歌には暗さも弱々しさもありません。傍らで少年から青年へと成長してゆく子息の歌も魅力的です。

『鐘の音』 水澤さんは、先の大戦で兄弟を亡くしておられます。長兄はサイパンで。次兄はシベリアで。どちらもご遺骨も還っていないのです。二首目は出色の歌です。与那国島は沖繩県。作者の発想には当然、沖繩が激戦地だった、ということがあつたのです。

『雲の形』 表紙装画の鴛鴦は、松村さんの筆になります。夫君との睦まじさが思われます。一首目、きのこ雲は特異な形ですから、入道雲でもそうは見えないと思いますが、体験者に夏雲はトラウマなのでしょう。ところが二首目、夫君に係ると神々しい雲なのです。

『蟹の宿』 藤原さんは蟹で有名な兵庫県香住の海近く、お姑さんと長く民宿を営まれました。二首目の蟹を育む海への信頼と愛は、「春の海は天津波にはなるまいと必死の抵抗したであろうよ」（震災詠）にも見えます。